

インド式暗算～インドの抱える教育の苦悩～

福永正明

インドチャンネル 2007/12/18 掲載

「インド式暗算術」は、ブームのようだ。関係本が書店に山積みされ、テレビでも紹介が続く。経済成長とともに、優れたIT（情報・技術）分野、工学技術 大学などから、理数系に強いインド人のイメージを作り出している。今では、日本の小学校でもインド式4桁暗算を採用したところもあるという。

しかし、インド社会を冷静に見る者としては、何か違和感を持つ。それは、インドの教育が素晴らしきものとは思えないからだ。例えば、広大な北インドのヒンドスタン平原の小さな何も設備もない公立小学校では、先生に続いて子どもたちが大きな声を出して計算を暗唱する。それは、教科書、ノート、黒板も何もないから出来る、それしか出来ない教育との意味がある。暗算には教材もいらず、達成の成果はわかりやすく、練習を続けるだけが授業となる。あるいは大都市の私立小学校では、「覚えること」が授業である。暗算だけでなく、あらゆる分野で教科書を暗記し、教科書に書かれた通りの答えが書けるように覚える。そして、授業は理数系に特化し、よりよい上級学校入学のための学習を繰り返す。

それは、家庭の希望が背景にあらう。富裕層の子弟は家庭教師や塾にも通い、過酷な入試を耐えて質の高い上級学校への入学をめざす。さらなる夢は、著名な企業や医師か、上級職国家公務員試験での合格となる。

インドでは、誰もが評判の映画俳優の名は知っている。しかし同世代の著名な詩人や小説家の名はどうだろう。クリケットは盛んだが、オリンピックや他の競技では、インド選手の活躍は乏しい。

理数系特化の社会は、底の浅い社会風潮を作り出している。それは、問題になりつつある犯罪増加、拝金主義や汚職腐敗にも関係していよう。考えることより、モノを動かすこと、つまり実学と便利な情報が蔓延している。それに対して、哲学や文学はもちろん、かつては栄えた社会学も衰退著しい。ポストモダンでの混迷は、インドの学問分野でも顕著であり、将来に影響を及ぼすに違いない。

最大の教育問題は識字率の向上であり、2001年国勢調査では15歳以上の識字率は61%（男73.4%、女47.8%）、つまり成人女性の二人に一人は読み書きができない。長い歴史と文化伝統に浸り、驀進する経済成長に踊らされているうちに、インドの尊大さと混迷は深まることになろう。私たちの気軽な賞賛は、実はインドの深い苦悩を照らしている。